

夏至の余白

夕方になってもまだ昼間のような
電車が去った明るいホームに

LaLaLa

肩から落ちてく一日の重さ
わずかに風が頭を撫でる
帰ってきたこの駅の
階段をよじ登る

風はまだ昼の名残の
楽しさをそっと届けてくれる
この肌に触れるたび
時間がゆっくり伸びてゆくように感じる

夕方の光 まだ明るくて
ビルのガラスも 淡い金色に

LaLaLa

改札抜けた駅前の広場
進むその先のスーパーに立ち寄り
ご褒美のスイーツの
値引きを選ぶ楽しさ

夏至の光は急がずに
押し付けてくることもなくて
ただそこに満ちていて
一日の終わり柔らかく伸ばしてくれる

夕方になっても まだ昼間のような
街の輪郭 明るい余白に

LaLaLa

命の洗濯日和

そっと降り注いでる朝の光が
肩に触れた時に気づかせてくれた
今日はきっと命の洗濯日和
これまでの重さを少しずつ外して

風に揺れて届く草の香りが
呼吸をする喜び気づかせてくれた
今日はきっと命の洗濯日和
背中の中の重さもひとつずつ解いてく

「大丈夫」とこの光が
なくしたものの手渡してくれる

眩しさの中で
自分が少しだけ変わってゆく
それだけのことで
心は少し柔らかくなる

胸の奥に潜む名もなき疲れが
光に当たって少しずつなくなる
今日はきっと命の洗濯日和
気づかなかった痛みも溶けてゆく

「大丈夫」とこの光が
なくしたものを救ってくれる

何かが静かにほどけていく
風が通るたび
それだけのことで
心は少し暖かくなる

そっと降り注いでる 朝の光が
肩に触れた時に 気づかせてくれた
今日はきっと 命の洗濯日和
これまでの重さを 少しずつ外して

コンコースの噴水

洒落た駅前のコンコースで
絶え間なく人々が行き交っている

噴水は今日も別の時間を
跳ね上がる水と共に生きている

山間の冷たさと川面のきらめきと
遠い旅路の思いそっとよみがえってくる

立ち止まり澄んだ気配に耳澄ます
見たことのない景色さえ懐かしく

喧騒の中のコンコースで
途切れることなく噴水語り続けてる

今ここにいる水たちが
歩んできた長い記憶語り続けてる

まだ川だった頃石に触れ草も揺らして
まぶしい太陽の光を運んでは月の影も運んだ

今は丸い池に囲まれ空へ向かって放つ
誰も人々は気づかずその声をすり抜けていく

跳ね上がるしぶき空気を震わす
濡れた石畳そっと受け止めてる

草原でひととき

夏の草原の中で見たもの
しなやかに背を伸ばした野草ひとつ
茎は風の流れを読んでる
葉は光をすくい揺れてる

真昼の光 強く受けながらも
吹き抜けてくる風を まともに受けて
背を伸ばした野草ひととき

草原のただなかでひとり立つように
折れず逆らわずしなやかに伸びて
自分の軸だけを守っていた

柔らかさと強さの中で
その茎は弧を描いて
葉の縁 光をすくい
揺れてる影さえ
緑に染めてゆく

夏の草原の中で見たもの
しなやかに背を伸ばした野草ひとつ
茎は風の流れを読んでる
葉は光をすくい揺れてる

乾いた大地の奥 のびたその根は
確かな地面の鼓動を受け取っていた
背を伸ばした野草ひととき

草原の中でただひとり立つだけ
名もなく飾りもなく強く伸びて
息づかいが聞こえてくる

折れそうで折れることなく
細い糸のような強さ
揺るぎなさ息づいてる
大地の温もり
そっと抱きしめてる

旅びとよ

思いつきでバスに乗って遠くの海
ここにくると計画していたわけでもなく
晴れた空に期待を込め思い立って
今を忘れ癒し求め 気分を変える旅びとよ

旅びとなぜ旅をするのか
答えは言葉にできない
けれども一つ言えることは
どこかに自分を探してる

はっきりさせることなく
ゆっくりと答えを探したいのかも

陽の眩しさ白く光り青い海に
遠く近く揺らぎながら散りばめられて
日常の喧騒からすっかり離れ
目の前広がる自然に 身を委ねる旅びとよ

旅びとなぜ旅をするのか
誰もが曖昧としてる
なぜならやりたいことに
理由などあるはずないから

誰にも気兼ねすることもなく
のんびり気ままに過ごしたいのかも

鹽竈の記憶

夕日が杉の木 斜めに染め
石段の上 影を落としてる
遠くなってゆく
昼のざわめき

2010年の記憶の中
幾度か訪れた神社のそば
昔ながらの茶屋
今もあるだろうか

震災前 鹽竈の夕方
ただ静かに その日が終わってた

潮風の香りを身体中 ほんのりと感じて
苔むした灯籠に“守られてる”気分思い出す

鳥居の赤は景色に溶けて
長い歴史の深さを語る
静かに夜の
火を灯すように

2010年のあの夜は
ちょうど行事が催されてた
降りた町から
光る石段

震災前 鹽竈の寿司屋
熱いお茶を ゆっくり飲み干す

一日の疲れを身体中 心地よく感じて
照らされた参道に“守られてる”気分思い出す

HIとAI

La Lu

HIで夏の歌を書く
何気ない画像 余韻求めて

今日はいつもと違う
深掘りを求めている
これまでのこと忘れ
違うものこさえて

裸足のままでポツンと立ってた
あたたかい土の上に

自分の姿を思い
なぞるように確かめながら
ここにいる感触を
自分の言葉で探す

ふた通りの プロセスにより
同じテーマ 溶け合わせてゆく

HIは心に残っていた一枚の
画像からつながる記憶の引き出し
AIが示すアルゴリズムとどこかで
ひとつの感覚で結ばれる

La Lu

HIは胸の奥に
眠る古い思いを揺らす

今日はいつもよりも
深掘りを求めて
これまで気づいてない
自分の心探して

セミの声が聞こえてくる
一瞬のいのち燃やす儚さと

自分の人生と長さが
違っているだけで
同じ運命を
たどってることを悟る

ふた通りの プロセスにより
同じテーマ 溶け合わせてゆく

HIはいのちのそのものの温度で
直感につながる言葉をつなぎ
AIが示すアルゴリズムとどこかで
ひとつの感覚で結ばれる

La Lu

AIで言葉与えて 夏のキーワード見つけてゆく中
出てきた言葉をヒントに 感情に結びつけてゆく

今日はいつもの
自分の好みの言葉を
これまでのデータで
思いがけない言葉で

白南風（しらはえ）のように形を持たぬまま世界をなぞり
草いきれの向こう 人の気配をそっと読み取っている

誰かの気配
背中に感じながらも
あたかも自分の
存在求めて

心に 残ってた
つながる 記憶の
AIが示すアルゴリズムとどこかで
ひとつの感覚で結ばれる

AIは風鈴の音のように透明な理（ことわり）を響かせ
どこからともなく魔法のように瞬間に言葉並べ

今日もいつもと
同じように答えて
これまでのデータに
ニュアンス合わせて

静かな野山に響き渡る見えない大きさのセミ達が
あたかも“ここにいる”という証をはっきりと示しながら

見えない気配
背中に感じながらも
言わずと知れた
運命を悟る

心に 直感で
つながる 言葉を
AIが示すアルゴリズムとどこかで
ひとつの感覚で結ばれる